
きっと私じゃなくても

まりな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつと私じゃなくても

【コード】

N0038K

【作者名】

まりな

【あらすじ】

遠藤 冬姫 21歳

自分じゃなきゃいけない理由

逆に自分じゃなくてもいい理由

愛する人のそばにいても、信頼する友人といても

仕事をしていても

別に自分じゃなくてもいいはず

そんな彼女の物語

プロローグ(前書き)

自分じゃなきゃいけない理由

逆に自分じゃなくてもいい理由

それを探し続ける彼女

プロローグ

何事にも向き不向きがある。

例えば、包丁はなんでも切れるけど紙を切るにははさみほど、綺麗に切れないように。

変な例えだったかな。

ほかにいい例えが見つからなかっただけなんだけどね。

人間にも同じように向き不向きがある。

こんな言葉があるくらいだもんね。

『 適材適所 』

どんな人材でも適所があるんだよね。

理想のやりたいことがあっても大概、現実では全然、違うことが向いていたりする。

それでも、がんばる人はがんばる。

私はがんばらないよ。

がんばりたいほどの理想はどっかにいつちゃったからさ。

私に向いていること？

それはまだ、自分でもわかっていないから答えられない。ただ、向いていないことならわかる。

淡々とした作業。主に工場作業は本当に向いていない。

一度は挑戦してみたけど、日に日に仕事嫌いになったよ。

でも、以外と物を作ることはうまくできたりするから自分でもよくわかっていないのかもね。

私は探してる。私にとっての適所を。

それがどんなところでもいい。

適所なんだから居心地はいいだろうしね。

日常

満足できていない。

私はふと、思った。

それはいつもの素っ頓狂な私の脳がたたき出した言葉。

その言葉は本当に突然、出てくるがいつだって的を射ている。

なぜそう思ったのか。

別に今日は雨だから、とかではなくて

お財布にあと、500円しかないことでもなくて

タバコをやめられずにいるからでもないだろうな。

ましてや目の前のお客様があまりに優柔不断だからでもない。

ぐるぐる回る思考をさえぎって

私のお客様に「どうぞ、ごゆっくりお考えください」と微笑んだ。

待ちくたびれた子供の手を握って会釈するお客様に頭を下げて見送ると私は先ほどまでお客様と眺めていたパソコンの前に戻った。

画面に映る無垢な子供の笑顔はとても愛らしかった。

「さっきの人、すごい悩んでたね。この子、可愛かったあ」

目の前の空いた席に笹倉さんが座って画面を見つめていた。

「カット数が絞れなくて。結局、写真集二冊、作っていききましたよ」

彼女はマウスをさわわり、次々と画面を変えていく。

ピンクの着物。青のドレス。赤いドレス。

若い少女が画面の中で巡っていった。

私の職場は写真館だ。

七五三や成人式の撮影、衣装レンタルなどを生業としている。

笹倉さんはカメラマンで社員さんだ。

ついでにというと私は契約社員。

この写真館「スタジオ タイム」のほとんどは女性だったりする。

10代から50代までいるスタッフのほとんどは何かしらの技術者だ。

着付け師や美容師、カメラマン。

それぞれ、苦勞して手に入れた技術を生かし一枚の写真を作る。

中には何の技術ももたない人間もいる。

私もその一人。

だって、まさか自分がこんな仕事に手を出すとは思っていなかったから。

日常2

「もう休憩は行かれましたか？」

「まだ。でも先に行つてきちやいなよ。私は次の撮影が終わるまで行けないから」

じゃあ、お言葉に甘えて、と私は手に持った注文書をまとめて席を立った。

笹倉さんは青いドレスにブーケを持って微笑む少女の手の形が気になるようで視線を上げることはなかった。

荷物をまとめてお店を出た。

「スタジオ タイム」は大きなショッピングセンターの一角、華やかなテナントが並んだ端っこだ。

色とりどりのテナントは眩しくて、私はそそくさとテナント街を素通りした。

従業員共通の休憩所には大きなテーブルがいくつか並び、何人かの従業員がお互いに距離を置いて座っていた。

華やかな表とは逆に休憩室は打ちっぱなしのコンクリートで殺伐としていた。

私は休憩室の一角の隔離された喫煙所に隠れるように入った。

ここが私の定位置。

喫煙者の数は少ないので大概、ここは無人だ。
人との距離を測る必要はない。

さて、さっきの「満足できていない」という言葉について考えよう。

満足はしてない。確かだ。

でもちゃんと生きてる。

人間として課せられた決まりには従っている。

お金を稼ぎ、税金を払い衣食住を確保している。

友人関係も今のところ落ち着いているし、もう半年、恋人はいない。

満足するも何も。今はこれくらいがちょうどいいと思っているんだ。
身の程にはあっているし、心地も悪くはない。

良くもないけどね。

皮肉めいた言葉がまた脳内で浮かぶ。

…こつという時のタバコはなぜか、うまい。

休日の始まり。

退勤して車に乗り込み、携帯を開いて受信メールを確認する。
5通もあった新着メールはすべて迷惑メールだった。
いつの間に以前ほど、鳴らなくなった携帯はその役割を十分に果たせずにかわいそうだ。

私はちよつと前から、他人との距離を大きくとるようになった。
それは親しかった人間にも以前よりも距離をおくことにもつながった。

別段、そうしようとしてそうしたわけでもなく、自然とそうするようになった。
これでよかったと思う反面、やっぱり寂しいや。

次の日は、休みだった。

携帯は鳴らないまま。

寂しさを紛らわすために登録した出会い系のメールはうざったいほど、来るけれど。

休みの日は嫌いだ。

余計なことを考えてしまう。

私はまだ、半年前に別れた恋人を忘れられずにいた。

思い出すのは綺麗な思い出と一番、思い出したくないこと。

幸せだった記憶は彼への未練を奮い立たすのだけれど、傷ついた自分を思い出しては連絡しようとする指が止まる。

彼は今頃、何をしているのかな。

追跡

散らかった部屋を見回す。

彼と別れてこの家に戻ってきてから一度もちゃんとした掃除はしていない。

ちよつと掘り返せば、彼の私物が出てくる。

それを見つけたくなくて手をつけられないまま、すでに半年。

どっかで食べかけのお菓子とかがないか、心配だ。

元彼と別れて、実家に戻ってきた最初の一ヶ月の記憶は今でも曖昧だったりする。

どうやって、生きてきたのかわからなくなっていた。

一人じゃないことに慣れすぎて、彼のいなかった頃の自分が見えなかったのだ。

泣いていたことは覚えてるんだけどね。

家に引きこもってやっと、外に出たのは二ヶ月、経ってからだった。

金がなく、支払いは滞り自動車保険を強制的に解除された。

携帯はとめられ、タバコを買う金もなくなっていた。

車のローンは母が立て替えてもらうようになった。

とどめに以前、もっていたクレジットカードの支払残高が26万、残っていた。

いつまでも滞納し続け、無視し続けた結果、弁護士から手紙がきた。

さすがの私も驚いて、自分が如何にダメな人間か気づいた。とりあえず、働かなければ。

なんでもいい。どうせ、やりたいこともないのだから。

そして、兄のバイトするキャバクラに入店した。

それから二ヶ月、必死に働いた。

週6でキャバクラへ行き、払えるものから払った。

クレジットカードの26万は交渉した結果、1年以内に分割で支払うということで落ち着いた。

キャバクラだとしても仕事をするとということがどんなだったか思い出した。

人間に生まれた以上、避けて通れない「働く」ということを私はすっかり忘れていた。

自分のために生きるためにお金を稼ぐ。

それが普通なのに、私は忘れていた。

なぜなら、元彼といたころ私は彼のために働いていたから忘れてしまっていた。

それはとても懐かしい感覚だった。

追跡 2

その頃には私は彼を思っただけ泣くことは減ってきていた。

生活も潤いを取り戻し始め、4ヶ月ぶりに自分の好きな服を買った。彼の好きな服じゃない。私の好きな服。

一人になってやっと、自由な気持ちになった。

それから、私は自分らしく、を強く考えるようになったよ。

忘れかけていた人との触れ合いを求めるようになった私はキャバクラで出会う男たちとデートに誘うようになった。

友達がほしかった。

寂しさが紛れるくらい、友達を増やしたいと願った。

もし、その中で次の恋ができればもう、さびしくなんか無い、と思っただ。

でもうまくはいかなかったけどね。

どんなに優しい男でも私は惹かれることはなかった。

心の内で私は元彼と比べていたんだと思う。

元彼がどれくらい最悪だったか、は誰も勝てないけれど一つ、一つの仕草、口調

私は元彼の影をひたすら追っていた。

そのことに気づいたら、出会いを繰り返すことを虚しく感じて、再び私は人との関わりを拒むようになった。

キャバクラと家の往復を繰り返す。

寂しくて自分の孤独が辛かった。

親しい人間とはたまに食事に行くことはあったけれど、次第にその連絡も減っていた。

そんな中、先輩の小春さんだけは頻繁に連絡を取っていた。私を訪れては他愛もない話がひっきりなしに飛び交った。小春さんには感謝しているよ。

寂しくて仕方のない時には泣きながら電話したりした。仕事を終えた深夜でも小春さんは電話に出てくれたんだ。うれしかった。

私にもこんな人がいたんだって、まだまだがんばれるって思えた。

小春さんも実は傷心だったんだけどね。

5年以上、付き合った恋人に別れを告げられてしまった。

それは私が実家に戻ってくるずっと前で、そのとき私は地元にはいなくて、後からやつれた小春さんから話を聞いた。

彼女はわざと明るく詳細を話してくれたけれど、本当は私よりずっと小春さんの方が傷は深かったと思う。

だから私は少しずつ、小春さん自身の話を聞くようになった。

深夜でも仕事でも、小春さんが私を呼んだらできるだけ会いに行くようになった。

それが私なりの彼女への感謝の気持ちだったんだと思う。

ただ、彼女が私にしてくれたように小春さんのそばにいるようにした。

今、思えば私たちはお互いに傷をなめあっていたようだ。

あの時、それが私たちには必要だった。

そうしなきゃ、自分の存在理由を得られなかったんだ。

泣きたい気分

あれから、半年。

早いもんだ。

すったもんだの半年間。

スタジオ タイムに入ったのもたまたまだけど、正しかったと思ってる。

今では泣くこともなくなった。

泣いたところで誰かがそばにいてくれるわけでもなし。

泣きたいと思ってても涙は出なくなったからちょっと自分が心配になつたりするけどね。

泣いて発散していたものは一体、どこに行ってしまったのか気になる。

もし、悲しみにまあ、もろもろ含めて「負の感情」に形があったらきつと、それは積み重なって溜まっていくはずだ。

外に出していないのなら、一体、どこに行ってしまったと言うのか。いつか、負の感情を溜める場所が満タンになって破裂してしまうんじゃないか、って心配になる。

馬鹿みたいな発想だから、恥ずかしくて人には言えないけれどその行き場所を考える。

それで私は泣きたいほど、不安を感じる。

もしも。って言葉は人間には切り離せないものだと言感するくらい。本当に「もしも」という得体の知れない不安ばかりだ。

そんなとき、私は仕事に没頭することで自分を保つ。

忙しくして、忙しくして自分を追い詰めることで考えを打ち消す。

でも、休みならその手は使えない。

携帯を鳴らしてくれる人はいないけれど、私が鳴らすことはできる。暇そうな誰かを探してメモリを開く。

誰も電話を取ってくれなくてもいい。

ただ、何か行動しなければ押しつぶされそうだ。

待ってなくても朝は来る。

いやでも朝は来る。

朝は好きじゃないな。

よっぽど、気分がいい日じゃなければ、一度で起きるなんてありえない。

ももとの生活パターンが昼型じゃないから仕方ない。

今日の予定を頭で考える。

仕事に行って、終わったら今日はバイトの日だ。

私は未だにキャバクラでのバイトを続けている。

金銭面はかなり安定してきたし、余裕こそないが充実しているのだけど、やめれずにいた。

…今日はちゃんとメイクしなきゃいけない。
めんどくさい。

実はスタジオ タイムは隣の隣の市だ。

毎朝、1時間半かけて出勤する。

本当に割りにあわない。

交通費は0だから結構、経済的に辛い。

自給は過去最低の仕事。

だけど、きつと今までが好条件すぎて私はとても恵まれた環境にいたんだ。

だから、身の丈にあったお給料はなんとなく清く大事に感じる。

10万ちよつとしかないお給料では本当に生活が苦しい。でも、世の中の何人かは私と同じくらいのお給料できっと、それは悲願する要素にはならない。

9月の土曜日は予約でいっぱいだった。

スタジオ タイムに限らず多くの写真館ではこのシーズン、繁盛期を目前に忙しくなる。

七五三の撮影でこつた返した店内は子供の泣き声や笑い声が響く。

私はため息を押し殺して、店頭へと出て行った。

結局、今日は休憩に行くことは叶わず、日が落ちかけた空を見上げながら車にのりこんだ。

疲れた体は少しきしんで、疲れ果てていた。

それは私にとって良い兆候で忙しくしていないと不安に飲み込まれるから。

さあ、これからバイトに直行して、知りもしない男たちに微笑みかけるんだ。

5時間後、バイトを終えて外に出るとまだ9月だというのに息が少し白かった。

深夜に帰宅すると家は暗く、私は簡単にシャワーを浴びてまだ、やっつてこない眠気を小さくなくて待つんだ。

「おはようございます」

「おはようございます」

万年寝不足の私だが、今の仕事で遅刻したことはなかった。やることに飢えている今の私にとって仕事はすべてだからだ。

恋愛をお休みしよう。

人間とかかわる前に自分と関わる。

と決めた私の日常はどこか味気ない。

「…おはようございます」

口々に返事は返ってきて、スタッフたちは朝礼の準備をする。今日の予約状況や日課の接客用語が響いた。

「最近、疲れてるね。毎日、バイトなの？」

笹倉さんとスタジオの開店準備をしているとふいに笹倉さんが心配そうに話しかけてきた。

「…毎日ではないですけど…そうですね、週末は本当に疲れます」
金・土はどっちも休めませんから。

と私は何も問題はないように答える。

大丈夫だよ。

いくら疲れたってタイムには迷惑かけないから、安心して。

心の中でそつと、皮肉をつぶやいた。

あ。心が疲れてる

また、不意に頭に言葉が浮かぶ。

この言葉はいつもの確に言葉をよこす。
多分、これは私の心の声。

だって、いつも正しいんだから。

比較的、平日は土日よりも余裕がでる。
予約もそこそこ。

みんな、自分のペースで自分の仕事を片付ける。

そんな中、カメラマンの真田 さくらは怖い顔をして店の入り口を
にらんでいた。

「…真田さん、どうしたの？めっちゃ顔、怖いよ」

「だって…、今日、集荷あるんだよね」
「はっ？」

集荷…って集荷？

宅急便が荷物、取りに来てくれるだけだよ。

「急ぎの荷物があるんですね？」

「いや、むしろいつでもいい荷物だけだ」

？な私の頭。

多分、顔に出ていたのだろう

真田さんは私の顔を見ずに小さな声で教えてくれた。

「…いつも来てくれる集荷のお兄さん…実は好き…なんだよね」
「あ〜！」

つつつい、納得して大げさにうなづく。

でも、にらんでるのはどうかと思う。

少なくとも私にはそう見えた。

「…えっと、アドレスとか渡さないんですか？」
「とても渡したい！…けど、渡せない」

4歳も年上の25歳の女性が顔を赤くして机に突っ伏す。

なんとも可愛いじゃないか。

つい微笑んでしまう。

なんて可愛らしい人なんだろ。

真田さんはあいかわらず、顔を上げて怖い顔で入り口を睨みつけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0038k/>

きっと私じゃなくても

2010年10月10日05時34分発行